

博士論文 要旨

就学前のわが子の発達が気になる保護者が求める支援に関する教育学的研究
ーソーシャルワーク実践における生態学的時系列モデルの生成についてー

佐々木 沙和子

本論文は、就学前のわが子の発達が気になる保護者が求めているソーシャルワークについて明らかにすることを目的とした。そこで、就学前のわが子の発達が気になる保護者を中心とした調査研究を行い、保護者が必要とするソーシャルワークの機能について検討した。さらに、保護者と保育者が幼児に関わる際に互いに見ている視点や必要とされる視点をもとに、保護者支援を行う保育者と保護者の関係性の構築について検討した。

第1章では、就学前のわが子の発達が気になる保護者支援の現状と課題についてまとめた。具体的に、乳幼児の保護者支援のために、保護者の心身の状況や環境を勘案することが必要であった。また、家庭・教育・福祉の連携を通じた障がいのある子どもと保護者が地域で切れ目のない支援が受けられるような体制作りが必要であることも示唆された。加えて、ソーシャルワークの視点で保護者支援を検討する必要があるのではないかと推測した。上記から、本論文が取り組むべき就学前のわが子の発達が気になる保護者支援に関する課題として、①保護者を調査対象とした研究、②保護者が抱えるソーシャルワークのニーズ調査、③保護者自身の環境や状況に着目した保護者支援の検討、④保護者と周囲との関係性をベースとした保護者支援の検討、を挙げた。

第1章で得た知見をもとに、第2章第1研究、第3章第2研究、第4章第3研究で、就学前のわが子の発達が気になる保護者の語りやニーズから保護者支援への知見を得ることを試みた。

まず第1研究では、幼児の診断の有無を比較軸として、保護者一人一人の語りから得られた、求めている支援についてKJ法による分類・分析を行った。その結果、就学前のわが子の発達が気になる保護者が求めている支援は多様であり、特に診断がない幼児の保護者の方が、診断がある幼児の保護者よりも、より多くのソーシャルワークの支援を求めていたことが明らかとなった。具体的に、診断のない幼児の保護者は「心理的サ

ポート」や「相談」の支援内容を求めている。

次に、第2研究では就学前のわが子の発達が気になる保護者の気持ちが揺れ動く場面や保護者のライフストーリーから保護者支援についての検討を目的とした。年長児のわが子の発達が気になる保護者を対象とした聞き取り調査を行った所、親子の生活が変化する転居や幼児の入園時・就学に向けた活動時に、特に保護者はわが子の発達について気になる場面が増えていたことが分かった。加えて、保護者のライフストーリーを理解し相談を担うことができる存在が、保護者支援に重要であると示唆された。

第3研究では、第1、2研究で得られた知見と先行研究を踏まえて作成した、就学前の幼児の保護者が求めているソーシャルワークの15機能に関する30項目のアンケート調査を実施した。保護者自身がわが子の発達に関して何らかの気づきがある場合と気づきのない場合を比較軸として、統計分析ソフトを使用しSPSSによるカイ2乗検定の分析を行った。その結果、わが子の発達に関して気づきのある保護者だけが求めている内容は7項目で、気づきなしの保護者だけが求めている内容は1項目であった。加えて、わが子の発達に関する気づきがある保護者がより求めている「相談援助機能」の「保護者との対等な関係性の中で問題解決に取り組み、協働するための支援」の項目に有意差が生じ、発達に何らかの気づきがある保護者へのより一層の保護者との連携を通した相談支援が求められていることが分かった。この結果から、保護者がより安心して子育てを行うことができる保育や支援の環境を整えていくために、保護者一人一人の背景から、保護者と保育者が協働関係を構築しつつ支援を検討する必要性について示唆された。

第1、2、3研究から得られた知見から、第5章では協働関係の視点として、Anderson, et al が提唱した「コラボレイティブ・モデル」の理論が本論文と近接すると考え、取り上げた。これは、生活経験である現実を対象化・客体化せず、他者や社会との相互作用の中で現実構成されていくと捉える視点で、援助者は自らの専門的な知識や立場という枠組みに被援助者を当てはめるのではなく、援助者自身も被援助者から学ぶ立場としての関係性となる。このような保護者と保育者という関係性の中での協働について調査・検討した研究や、コラボレイティブ（協働）の理論が保護者と保育者の協働関係を立証できる裏付けとなるための先行研究が見られなかったことから、次章の課題とした。

第6章第4研究では、上記の知見をもとに、具体的に保護者と保育者の関係性に着目した事例を基に、保護者と保育者の協働関係において、どのような視点や関わりが保護者支援により良い効果へと結びつくかについて検討した。具体的には、保護者3名と保

育者 1 名に対して個別の聞き取り調査を実施し、保護者と幼児の担任であった保育者の具体的な実践やエピソードの振り返りに関する語りを、複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Modeling : TEM) を用いて分析した。その結果、保育者が行う協働の視点として、保護者自身の生活面や気持ちにも配慮しながら幼児の発達を共に支えていく内容が得られた。また、保護者と保育者の協働関係には「気持ちの合意形成」「対象児の認識の再構築」「保育者自身も学ぶ意識」が必要であった。保護者自身の気持ちや体調面にも配慮しながら話すタイミングを見計らうことで、保護者が保育者を信頼する気持ちへとつながっていた。また、生活環境が変化しても保護者と保育者がつながり続けることができるという関係性も、協働関係に必要な視点であることが示唆された。一方で、保護者同士の関わりの効果に関しても、保護者と保育者それぞれの語りから得られた。そのため、保護者支援には、保護者同士の関係性を保育者がどのように意識していくかも重要であると示唆された。

次に、第 4 研究の課題をもとに、第 7 章第 5 研究として第 4 研究の調査対象であった保護者 3 名と保育者 1 名によるグループインタビューを実施し、個別の聞き取り (第 4 研究) で得た内容をもとにした後続調査を行った。その結果、保護者が気づいていなかった当時の保護者自身や、わが子の姿に関する語り合いの中から、保護者と保育者が互いやわが子、さらに他児を認識していた記憶が共有された。また、保護者はわが子の発達への不安はあったが、保育者との協働関係を通して安心を高めていく中で、わが子の発達への捉え方が柔軟になり気持ちを前向きにすることができたという語りも得られた。そのような関係性の構築を可能とした背景には、保護者の未来も視野に入れた保育者による関わり方があったと推察した。保育者は、保護者の過去の経緯や、今後保護者自身が自らの意思で判断し、幼児の発達を自らの言葉で語り支えていくことができるような未来を見据えた支援を検討することが必要であると推察した。

さらに、保護者自身が発達や保育を学ぶ機会の充実も必要であると示唆された。このことから、保護者自身が発達や特性に合わせた関わり方を学ぶことで、わが子の発達の理解を深め子育てへの安心感を得られるのではないかと推察した。例えば、第 4 研究では、保護者がわが子の通う園の分園でサポーターとして他児の支援に関わる中で、わが子の姿を客観的に捉える視点を得て、わが子の行動の理由を理解することにつながったという語りがあった。そのような観点は第 4、5 研究の他の保護者にも見られ、学びへの意欲が語られていた。

このように、保護者と保育者の協働関係を通じた保育を実践していく視点や、保育者に必要な視点として保護者の過去・現在・未来を見据えた時系列で目の前の保護者への関わり方を検討・実施していくことが挙げられた。加えて、保護者自身が発達や保育を学ぶ機会を設定することが必要であると示唆された。

第1～7章で得られた知見を踏まえ、第8章の総合考察では本論文が対象としている就学前のわが子の発達が気になる保護者と、周囲とのエコロジカル（生態学的）な関係性の視点で保護者支援を検討することが必要ではないかと述べた。また、保護者と保育者がどのような関係性の中で、子どもや互いの姿をどう捉えていたかについて明らかにしていく中で、保護者自身が必要と考える保護者支援について検討することに意義があるのではないかと推察した。これは、就学前のわが子の発達が気になる保護者を中心とした調査を行ったことで得られた知見であり、保護者と保育者が協働で幼児の発達を支えていく視点が必要であると考えた。具体的に、就学前のわが子の発達が気になる保護者支援の在り方として、ジャーメインのエコロジカル視点のソーシャルワークと、谷口のエコロジカル・ソーシャルワークに加えて、Bronfenbrennerの環境下で変化していく生態学的移行の視点も視野に入れた切れ目のない継続的な支援と共に、保護者と保育者はAnderson, et alのコラボレイティブ（協働）な関係性を築いていくことが必要だと考え、生態学的時系列モデルとして提示した。加えて、保育者には協働関係の基盤として、Andersonの「無知の姿勢」が重要であると推察した。すなわち、自宅での幼児の姿は保護者が持つ知識や経験であり、それらの知識や経験がない保育者は保護者から学ぶ姿勢を意味する。以上から、生態学的時系列モデルの視点で、生態学的なつながりの中で保護者と保育者が協働関係を築き、保護者と幼児一人一人の生活や気持ちのタイミングを見計らいながら支えていくことが必要であるとまとめた。

第9章では結論と今後の課題について述べた。具体的に、本論文では就学前のわが子の発達が気になる保護者が求めているソーシャルワークについて明らかにすることを目的とし、①就学前のわが子の発達が気になる保護者を対象とした調査研究の重要性、②就学前のわが子の発達が気になる保護者のニーズの多様さ、③保護者と保育者の協働関係の必要性と共に、それらの知見を総括して④生態学的時系列モデルをベースにした保護者支援の必要性について明らかにしたと述べた。一方で、今後の課題としては、本論文で得られた理論の実証研究と共に、保護者が支援に対して要・不要を判断する背景を調査し、保護者側の要因から考える保護者支援の研究が必要である。